

「Pole to Pole 2000」の日記から 人と触れあった地球半周の旅

早稲田大学 4 年 石川 直樹



パタゴニア・ペレトモレノ氷河を背に



2001 年 (平成 13 年)

4 月号 (No. 671)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

目 次

人と触れあった地球半周の旅・・・ 1
報告

図書委・第9回「山を語る」・・・ 6

医療委・第12回国際低酸素会議 6

総務委・支部事務局担当者会議 7

三水会・竹寺から子の権現・・・ 8

自然保護委・高尾の森づくり 8

資料委・版画2点寄贈・・・ 8

第4回秩父宮記念山岳賞の推薦・ 7

海外の山・・・ 9

東西南北

ネパールのマオイストと旅行者

の安全について・・・ 10

山の絵の路線論争・・・ 11

マッキンリー 登頂の代償・・・ 13

ボリビア日記・1・・・ 14

会員アンケート結果報告・1・・・ 15

図書紹介・・・ 19

『深い浸食の国』『ニュージーランド・アルパイン・ジャーナル』『陸奥の屹立峰・岩木山』『丹水3号』

ルーム日誌・図書受入報告・・・ 20

会務報告・・・ 21

INFORMATION・・・ 22

▶ 日本山岳会事務局 (含図書室) 取扱時間

月・火・木・・・ 10～20時

水・金・・・ 13～20時

第2、第4土曜日・・・ 閉室

第1、第3、第5土曜日・・・ 10～18時

「Pole to Pole 2000」の旅から一月末、帰国した。カナダの極地冒険家マーティン・ウィリアムズが企画した世界的なプロジェクトで、参加者は世界七カ国 (アメリカ、カナダ、韓国、南アフリカ、日本、アルゼンチン、フランス) から選ばれた八人の同世代の若者からなっている。ほかには二〇〇〇年四月五日に北磁極を出発し、徒歩、スキー、カヤック、自転車など人力手段を使って南北アメリカ大陸を縦断し、南極点へ向かった。その間、様々な環境プロジェクトなどに携わり、各地でプレゼンテーションを行いながら旅を進めた。

北極では七頭のシロクマに遭遇し、カナダ北部の凍った道を自転車で駆け、カナダを西から東へ横断、さらにアメリカを東から西に横断し、中米を抜け、パナマからヨットに乗ってエクアドルに渡った。エクアドルからペルーを抜けてチリまで南下し、アタカマ高地を越えてアルゼンチンに入り、首都ブエノスアイレスを通過してパタゴニアの南端、プンタアレナスに到着。南極大陸のパトリオットヒルズからスキーで南極点を目指し、二十世紀最後の大晦日を南極点で迎えた。今回は当時の日記 (一部を抜粋) を振り返りながら、十カ月に及ぶ地球半周の旅を追って思う。

二〇〇〇年四月五日
乱氷帯に杳然

レゾリュート時間午後五時、北磁極近くの平らな雪の上に、五人乗りの小さな飛行機が着陸した。北磁極周辺はひどい乱氷になっていて、飛行機は地面すれすれまできて着陸できずに再び飛び上がることを何度も繰り返した。飛行機に乗って酔ったのは初めての経験だ。北緯七九度四二分、西経一〇六



トレーニングに励む

度三〇分の地点が北磁極。ぼくらはそこから少しだけ離れた地点からスタートする。

飛行機はぼくたちを降ろすとすぐに飛び去り、あとには猛烈な寒さと見渡す限りの乱氷群があった。マイナス三五度、動いていないと体の機能が徐々に弱っていく感じがする。

ぼくらはスタート地点で写真を撮ると、すぐにスキーを履いて出発した。約六〇キロの重量がある機をハynesとロープで腰につないで、南に向けて歩く。うわさに聞いていた乱氷だが、いざそれを目の前にすると、呆然としてしまう。普通に歩ける場所など全くない。スキーには滑り止めのシールが装着されているがあまり役に立たず、

機重の重さも加わって、一〇メートル歩くのにも苦勞する。こんな氷の中、レゾリュートまでの七〇〇キロ弱を本当に歩けるのだろうか。

四月二十二日 北極熊との遭遇

典型的ないつもの行動パターンを書いておこう。朝七時に起きて小便をし、ココア入りのオートミールを「もう食えない」と感じるまで口に押し込む。そして、食事当番が雪からその日の飲料水を作り始める頃、大便をしにいく。水を作り終え、靴擦れやマメの処置をして、ビタミン剤を飲んだり日焼け止めを塗ったりした後、九時頃パツキング開始。スキー靴を履いて外に出て、テントをたたむ。ボールの継ぎ目の部分が凍り付いているので、息を吹きかけて折り畳む。この時は、手足が冷たく、体が温まっていけないので、つらい。十時頃、動き始める。一時間三十分から二時間おきに休憩し、GPSで方角を確認したり、チョコレートやソーゼーなどの行動食を食べ、水分も補給する。六時から六時三十分に行動終了。テントを張り、すぐに夕食を作る。食後に一人二リットルの水を食事当番が作る。

明日が食料などの補給日のため、今日は早めに行動を切り上げた。飛行機が着陸できる約四〇〇メートルほどの平らな雪面を探さなくてはならなかったからだ。

午後十時頃、寝袋に入り、夢見心地

になりかけた頃、隣のテントからディランの声がした。「デブリン」。普段と同じディランの声だ。デブリンはすでに寝袋にくるまっている。彼はいつも寝袋に入ってから二分以内にいびきをかきはじめる。眠りに就くのが早いのだ。デブリンは三秒くらい間を空けて、面倒そうに返事をした。ディランがいう。「ライフルを持て」。焦った声ではない。再び三秒くらい間を空けて、デブリンが飛び起きた。慌ただしく寝袋のジッパーを開け、外に飛び出た。最初、何のこともわからなかったが、ようやく事情を察し、ぼくも続いて外に出た。北極熊だ。すぐ間近にいる。一五メートルほどだろうか。ディランがライフルを構えながらローリーを呼んだ。デブリンも銃を構えた。デブリンはアメリカでサファリのガイドをしていただけあって、ディランに次いで銃の経験には長けている。それにしても熊との距離が近い。ぼくが懐からカメラを取り出そうとした瞬間、銃声が響いた。ディランが引き金をひいたのだ。北極熊は背中を向けて走り出した。まだ隣で銃を構えているデブリンの足が震えている。

熊の姿が完全に視界から消え去った後、足跡を調べてみると、テントの本当にすぐそばまで来ていたことがわかった。ディランが足音に気づき外に出なかったら、どうなっていただろう。北極での生活において、北極熊の存在は脅威だ。今日改めて北極熊の存在を再認識させられた。

五月十二日 北極圏から自転車旅行スタート

今日、再び北極圏に入った。北極遠征が終わって、もう寒いところはないだろうと思っていたら大間違いだった。マイナス一〇度で雪が降っている。イヌビクという町からカナダ自転車横断の旅を始めるはずが、イヌビクに至る路面が凍結しているため道路が封鎖されているという。そのため、予定を変更して、ユーコン準州とノースウエスト準州の州境、北極圏に少し入ったあたりから自転車の旅を始めることになった。

北極で使っていたゴアテックスジャケット、ゴアテックスパンツをこんなところで再び使う羽目になるとは。東からの風が猛烈に強く、自転車に乗りながら、顔に凍傷を負うかと思った。途中、五〇センチほどもあるハリネズミや、ムースの群を見た。ツンドラの大が白い山々とともに視界全体に広がり、人の気配はない。アップダウンを繰り返しながら、ぼくたちはリレー形式で距離をかせいでいった。

七月七日 ハーバード大学でプレゼン

ブラウン大学の寮を朝発つ。ブラウン校内の芝生でミーティング。最近、ミーティングは紛糾気味でチームのムードも少しばかり低下しているように思う。長い旅をすれば、当然ほころびも出てくるわけで、そのようなチクチ

クした人間関係までこの日記で書いていいものか、戸惑う。ぼくはストレスなどをほとんど感じないほうなのだが、明らかにイライラしている仲間の中にはいる。ある編集者にはそのような人間関係を突っ込んで書いたほうがいいと散々言われているのだが、どうにも踏み込めずにいる。そのようなテーマを書く、どうしても自分の主観が前面に出てしまい、自分の色眼鏡を読む人に押し付けているようで、気が引けてしまうのだ。恐らく、そんなことを気にしたくないで、がんがんに書けばいいだけなのだろうが。うーむむむ。

二時頃ハーバード大学に到着。ケン



強風のパタゴニアは自転車



パナマ・エクアドル間はヨット

ブリッジという町に大学はあり、学生の町らしく、本屋や感じのよさそうなカフェが周りを囲んでいる。ハーバードの学生に向かって、自分がプレゼンをするということとは、少し信じ難くもある。ハーバード大学は文句なしに世界最高レベルの学舎であり、JFKやビル・ゲイツや大量の著名な人物を輩出している。ぼくみたいなわけのわからない遊び人が（しかも英語も達者ではない）、壇上からは何年かの学生に向かって何を言えるというのか。素直に自分の経験から話せることを話すしかない。

北極のこととミクロネシアのことを例に出して話した。ハーバードの学生は、思っていたより気さくでノリもよかった。静まり返っていたらどうしようかと思つたが、反応もよく嬉しかった。プレゼン、無事終了。

八月二十五日 インターネット接続の苦勞

朝からインターネットの接続できる場所を探して町をさ迷い歩く。公共の電話屋といったものがたくさんあり、接続も簡単にできるかと思つたが、大間違いだった。フロントが電話をしてそれを子機につなぐといった方法のため、パソコンをつなぐことはできない。インターネットカフェもたくさんあり、

そこでも試みたが、一つの回線に全てのパソコンがつながっており、個人のパソコンをつなぐ余地はなかった。メキシコの電話事情は極めて悪く、原稿などを送らなくてはならない身にとつてはかなりつらい。ぼくは旅行代理店に行つて、バスなどの料金を聞き、最後に代理店の電話回線を一分だけ使わせてほしい、と頼み込んでなんとかインターネットに接続し、メールを送っている。綱渡り状態だ。

九月十日 セロチリボ登頂

朝四時起床。四時三十分出発のはずが、ストーブの調子が悪くオートミールを作るのに少しばかり時間がかり、五時出発となった。

ヘッドランプを用意したがその必要もなく、はつきりとした道を足早にたどる。一つの谷を越える寸前で太陽が姿を現した。緑の大地は朝一番の光を浴びて金色の野に生まれ変わり、空は突き抜けるような透明なブルーを描き出す。ぼくらは一日の中で一番美しい時間を生きている。写真を何枚か撮り、デイルンとともにじつと空を見つめ続けた。

しばらく丘にたつた後、再び登りにかかる。一つの谷を越えると、ようやくセロチリボの頂が見えた。左手に小さな湖を抱え、山の背後には幾重にも重なった雲の連なりが見える。昨日の雨が嘘のように快晴で、太陽が燦燦とぼくらを照らしていた。セロチリ

ボのコル（鞍部）までくると、頂上はすぐ近くに見える。ここからは傾斜が少しばかりきつくなり、上に登っていくにつれて多少手を使わなければならないほどになった。二人とも激しく息切れしながら、がむしやりにノンストップで登った。最後の大岩を登りきるとそこが頂上だった。

空には雲一つなく、三六〇度の視界が水平線まで広がっている。北側にはカリブ海が見える。無数の火山に囲まれ、火口もしくは山と山の間にできた窪地には水が溜まり小さな湖を作っている。南側にはタラマンカ山脈の峰々が連なり、雲がうっすらと山の頂をかすめている。ぼくはこの雲上の世界が好きでたまらない。鳥のように地上を俯瞰することができ。デイルンと抱き合い、しばし標高三八二〇メートルからの風景に見とれる。

九月二十三日 ドルフィンスイム

内海にいたあいだはよかったが、外海に出たからはチームのメンバーの誰が多かれ少なかれ船酔いになっている。船酔いは平衡感覚を掌る三半器管が船の揺れによって正しく機能しなくなるために起こる。従って、船酔いにならないためには、水平線や陸の固定物など動かないものを見ているのがよいと言われるのだ。しかし、今回のように何日ものあいだ船の上で生活する場合、船取りを任せられたり、料理をしたり、トイレに行ったりと船上で様々

なことをしなくてはならず、屈強な者でさえ慣れないうちは必ず船酔いにかかってしまう。

以前ミクロネシアの航海では二日目ですぐ吐き、その後は何ともなくなつた。今日までばかりは順調だったものの、船内と船上を行ったり来たりしながら写真などを撮っていると、だんだん気分が悪くなってきた。

パナマ湾を出ると途端に海が荒れ出した。高いうねり、マストをしならす強い風。船速は五ノット。このヨット「フリーダム号」は十二人のクルーと、人数分の食料や水を積んでいて、通常の基準からすると、とても重く重い。その船が五ノット、時に六ノットで進むというのはかなりの速さである。

マッコウクジラ三頭を見た。その後、四、五頭のイルカの群れがヨットに近づいてきた。ハシナガイルカだと思われる。いつもと違い長いことヨットの先端を泳いでいたので、エンジンを止めて、ヨットの後部から海に飛び込んではイルカに近づいてみることにした。ぼくとハイジとジェシカが海に飛び込む。が、残念ながらぼくらが泳いで近づくと群れは少しばかりヨットから遠ざかってしまった。

十月二十五日 砂漠の向かい風は引力をも押しつける

五時三十分起床、六時三十分スタート。今日は一人五七キロこぐ。ナスカから南へと向かい、カマナという町を目指す。とんでもなく強い向かい風。

まるで壁だ。ただの比喩ではない。体を風に向かつて傾けても倒れず、体は斜めにキープされる。こんな風の中で自転車走をこぐのは地獄だ。ペルーの砂漠地帯ではいつも向かい風なのはなぜだろう。南から風が吹くと決まっているのだろうか。

右手には青い海、水平線は霧に霞んでぼやけている。左手は砂丘、海からの風に吹き飛ばされた砂が自転車全体を覆う。さらに上り坂もあり、時々叫びながらこぐ。

マチュピチュ以前よりも体力がついた気がする。マチュピチュ以前は、お腹をこわしたりして体調がよほど悪かったのかもしれない。今日はかなりの悪状態の中で五七キロをこぐのにそんなに時間がかからなかった。自転車をこぐのも実質あと二週間ほどと考えると、力も湧いてくるというものだ。

カマナという小さな町のガソリンスタンドでいつものように野宿。

十一月八日 パンパはどこまでも

六時三十分起床。一人六七キロ走る。雨が降ったり止んだりぐずついたり天気が。広大なパンパの中を行く。一つの放牧地が終わると、また一つの放牧地が現れ本当に牛が多いと実感する。最近再び、鳥やスカンク、犬の死骸が道端に放置されているのをよく見かけるようになった。カナダのサスカチュワン、グレートプレーリーのような大草原が永遠に広がっており、行っても行

っても景色が変わらない。相変わらず路肩のない二車線の道で、自転車の乗りにくい道だ。

こないだマーティンがぼくの太腿を指差して「かなり筋肉がついたな」と少し驚きながら言った。ぼくばかりでなく、これまで長いこと自転車をこぎ続けてきて全員足の筋肉だけは六〇キロ走るとかなり疲れたものだが、今では一気にこぎ抜けることができる。一方で南極では上半身の筋肉も重要になってくるので、足ばかりでなく上半身も鍛えなくてはならないと思う。

サンタロサという町を抜け、ジェネラル・アチャという小さな町に到着。メルセデスの知り合いのいるフラットに泊まらせてもらう。深夜一時就寝。

十一月十四日 南極への準備いよいよ

今日は南極に向けた食料の準備とパッキング、南極で使う機具の整備、ピギーとピーストの大掃除を行った。チボレティがパンタに着くまでの最後の休養地かつ補給地点なので、南極への準備をほとんどここでやっておかななくてはならない。

ピギーとピーストはパンタアレナスで売りに出す予定なので、パンタに着く前になるべくきれいにしておかななくてはならない。といっても、どちらも元から中古車の上に、特にピギーはあらゆる部分がへたつていて買い手が現れるか疑問だ。大雨が降ると車内は水浸しになり、スピードメーターは壊れ、

天井に行く梯子は外れかかり、網戸はちぎれて、窓付近にはたくさん羽アリが巣くっている。さらに急な上りでは自転車よりもスピードが遅い。確かにぼろぼろだが、北極圏からどうにかここまで走ってくれたピギーには感謝している。

機具の整備はディランとデブリンが担当していた。北極で使った機具は所々にひびが入っており、バックルが壊れている部分もある。新しい機具の材質は以前と同じプラスチックだが、底が浅く長さも北極で使っていた機具の一・五倍くらい大ききがある。南極では食料の補給などがないので、最初から一カ月分の食料を運ばねばならず、機具へのパッキングは重要になってくる。デブリンは機具と機具を結ぶロープに自転車のチューブを用いているという試していた。こればかりは実際に使ってみないとわからない。

ぼくは食料のパッキングを手伝っていた。メルセデスのお兄さんが食料品店を経営しており、南極の食料は全てそこからの寄付となった。メルセデスファミリーの力は強大だ。ぼくらは朝食のオートミールと行動食のドライフルーツの仕分けをした。オートミールには粉ミルク、イースト、オイル、砂糖、干しぶどうなどを混ぜて南極仕様にする。テント一つに対する一食分をビニール袋に詰めていった。とめどなく続く仕分け作業をしながら、毎朝オートミールを気持ち悪くなるまで食べていた北極を思い出した。真反対にあ

る白い大地へ再びぼくは向かおうとしているのだ。

十一月二十二日 凄まじき風の大地

七時三十分出発。一人四〇キロ。

パタゴニアの強風は予想していたことだが、実際走ってみてこの風の凄まじさを肌で実感している。この風は自転車乗りにとっては暴力的ですらある。ぼくのバートの前半は追い風を受けて、羊達を横目に両手離しで鼻歌を歌いながら自転車をこいでいた。リオマヨへのジャンクションを右に曲がった途端、追い風が横風となり、さらに向かい風になった。悪いことは続くもので、上り坂まででてる。上り坂では一番軽いギアに入れても自転車ごと風を持っていられそうになり、自転車を降りて歩かざるをえなかった。身をかがめて自転車と共に歩いていると惨めな気持ちになつてくる。時折現れる車が「何をしてるんだ、こいつは」という表情で横を通りすぎていった。強い向かい風で思い出すのは、東方ナタで風雨の中をこいだときと、ペルーの砂漠で受けた向かい風だ。しかし、このパタゴニアの風に比べるとそれらは赤子のようには思えてくる。これは台風そのものだ。

確かにつらくもあるが、この厳しい環境に自分があること、人間を一ひねりで吹き飛ばす力強い自然の中にあることがただただ嬉しい。文明に飼いつけられた身体がみしめし音を立てるの

を聞くと、眠っていた力が奥底から湧きあがってくるようで、生きていることを実感する。パタゴニアの大地に感謝。

*

南極点に二〇〇〇年十二月三十一日到達。このあとビンソンマシフ、アコンカグアを登って一月三十一日帰国した。

Poleo Pole という旅、当初は極点と極点を人力による移動で結ぶという、肉体的なアドベンチャーとしてのイメージが強かったが、実際はそのような要素よりも、行く先々で様々な種類のボランティア活動をしたり、学校や地域のコミュニティなどでプレゼンテーションを一日に何回もこなしたりと、当初のぼくの予想よりもだいぶ毛色の異なるものだった。Poleo Pole は旅としてのフィジカルな部分に焦点をあててではなく、地球上に住む多様な人々と環境との関わり合いを重視した、今までにない新しい形のエクスペディションだったといえる。参加者もアウトドアのエキスパートというよりは、環境問題や社会にコミットする意欲の強い者が集まるという可能性重視の人選だったように思う。

最初はそのギャップに戸惑いもしたが、旅を終えた今、ぼくはそれによかったと心底思っている。個人の

旅なら強いモチベーションと時間、費用さえ工夫できればどのような旅も不可能ではない。そのような個人としての旅も面白いが、ぼくが特に興味を持つているのは、自分の経験や気持ちを多くの人とシェアする(分かちあう)ことなのだ。だから日々の記録や通信に力を入れ、旅の間はできるだけ多くのことをこちらから発信しようという心がけていた。山の頂に立つことよりも、自分の中で山をとりまく環境や海の伝統航海術に重きを置いているのはそのためだ。海図もコンパスも使わない伝統航海術は人々とそれを分かちあうことによつて多くの魂を揺さぶり、人と人を繋ぎ、新しい波を作りだしていく。

Poleo Pole は、他人とコミットする旅だったと明言できる。それは七カ国の言葉や文化の違う若者との共同作業に始まり、通過する国々でできるだけ多くのローカルコミュニティ、NGOなどと連絡をとって社会的な活動に参加させてもらい、人々と意見をシェアして議論を深めていくという旅のスタイルに表れている。当然意見に多少の相違はあるものの、企画者のマーティンやそれぞれのメンバーのPoleo Pole に対する意識はそれらのことで概ね一致していた。

「海外に出ること自体が一大事業だ

った」一九六〇年代から「行こうと思えばどこにでも行ける」世紀末を経て、さらに二十一世紀は旅への考え方自体に大きな変化が現れるだろう。「く」に登った」「く」を横断した」だからすごい、という時代は終わったのだ。趣味として個人の旅を楽しむ者はこれからも増えつづけるだろうが、同時に様々なツールを使つてそれらの先を考える者も増えていくに違いない。

さて、次は……。三月三十日、チヨモランマに向かう。五月下旬にはPoleo Pole の日記をまとめた『この地球(星)を受け継ぐもの』(仮題)が講談社より発売される。

アンデス・プランカ山群トレッキング 11日間

発着地 東京・大阪

【ツアーのポイント】
テント4泊の比較的短いトレッキングですが、毎日、美しい山々がふんだんに眺められ、標高4,750mの峠も越える充実コース。トレッキングの前にはワラスをベースに高所順応。

【出発日】

●5/24 ●6/7 ●6/21
●7/5 ●7/19 ●8/16
●9/13

426,000円

498,000円



ALPACOA ツア サービス 株式会社

〒1105-0003 港区西新橋1-12-1 (西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06 (6444) 3033 名古屋 ☎052 (581) 3211 福岡 ☎092 (715) 1557

報告

REPORT
4月

図書委員会

第九回「山を語る」
アルバータ峰(カナダ)

一九二五年(大正十四)、我が国からの初の海外登山隊がカナディアン・ロッキーに派遣され、アルバータ峰の初登頂に成功した。



アルバータ峰の初登頂を語る山田二郎名誉会員

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

今回は名誉会員の山田二郎氏を講師に迎え、この遠征にまつわる話を中心に語っていただいた。山田氏は、三田両氏の薫陶を受けた方であり、先の七十五周年記念トレッキングにも参加された。この海外遠征の関連資料をていねいに調べ、時にはエピソードも交えながら、計画の発端から登頂へと順を追って語った。

山田氏は、遠征メンバーのプロファイルについては個別に詳しく紹介したが、慶応だけでなく、交流のあった学習院にも声をかけたこと、そして日本山岳会では臨時の役員会などを開き、早急な手続きを経た上で、全員が会員であることから「日本山岳会登山隊」として遠征することになったと、その経緯を語った。

またこの遠征は、新聞社の後援のもとに実現することになったが、新聞社の事前の大きな宣伝記事などに対し、大島亮吉さん(入営中)は

友人に宛てた手紙の中で批判的な感想を述べていた、とつけ加えた。

横さんたちはジャスパーのホテルで、スイスから来ていた二人のガイド(フーレルとコーレル)に巡りあっている。山田氏はこれから二人のガイドが登頂で果たした役割にも詳しく触れ、もし彼らに巡りあうことがなかったら、おそらく初登頂は成功しなかったであろうと語った。また同じ時期にアルバータを目指していたアメリカの登山家、ヴァル・フイン氏の協力的な助言も大きかったと思うと述べた。

初登頂した山頂での横さんたちは、無言で仲間たちと感激の握手をして喜び合っただけだったということについて、山田氏は登頂者はそこでよく万歳をしたり、旗を振ったりするが、横さんたちはさすがにスマートであつたものと思うと称賛した。

またこのとき山頂にビッケルとメモを残したことはよく知られているが、あの細川侯のビッケルは有名な銘柄のものではなく、普通に市販されていたビッケル(ブリマ)であつたことも披露した。

この海外遠征については、山岳会の小集会や臨時大会で報告されたという記録はあるが、公式の報告書がないのは不思議なことであると述べた。またこれについてはカナダ山岳

会より報告書を求められたことがあり、三田さんが原稿を書き、それを大島亮吉さんに英訳して送るように頼んであつたが、その原稿を大島さんが紛失してしまったという。

最後に山田氏は、今回カナダ太平洋鉄道に沿って車で走りながら、七十五年前に横さんたちはどのような気持ちでアルバータにアプローチしていったのかと思うと感無量のものがあった。当時は今日とは違って不便であり、装備も粗末なもので、難しい山に初めて行つてよく登つたものと思う。写真を見ただけで、これは登れるといった横さんの山を見る目は常人の及ばないものを持つていたと思う、と結ばれた。

二〇〇〇年十月二十七日、十八時三十分よりルーム集会室にて。進行司会：大森久雄、参加者四十一名。

(松家 晋)

医療委員会

カナダのジャスパーで
第十二回国際低酸素会議

二〇〇一年三月十日より十四日まで、カナダのジャスパーにて、第十二回国際低酸素会議が行われた。当会からは中島道郎、堀井昌子、志賀尚子、山本正嘉、増山茂会員が参加した。

この会は、急性高山病の定義、評価方法を世界共通のものとした第七回会議でのレクルーズスコアが有名であるが、この名称が示すように、カナディアン・ロッキーマウンテンの山で二年に一度行われているものである。今回は、遺伝子からベツドサイドまで、と銘打って行われた。高地馴化や高地での運動能力と関係するかと注目を浴びているいくつかの遺伝子の可能性が調べられ報告された。現在のところこの領域ではなかなかクリアカットな結果を出すのは難しい。現在の研究方法の単純な延長線上にはあつと驚くものは少ないのでは、という空気が感じられた。それでも、ペルーのグループはA C E 遺伝子に高地居住民に独特のパタ

ーンを見いだしており、遺伝か環境かについての古い考え方はそのうち一掃されるであろう。会場は、ジャスパール・パークロッジである。昨年八月、アルバータ二〇〇〇プロジェクトの最後を盛大なパーティーで締めくくった場所である。ホテルの支配人が挨拶に来たのは当然として、カナダ山岳会が会長のマイク・モーターイマー氏がわれわれJACメンバーをアイスクライミングにさそってくれた。ジャスパール在住の会員が二日間にあつてアイスクライミングにアテンドしてくれたものである。

カナダでのアイスクライミングはおすすめで、町からほんの二十、三十分のところに日本では考えられない氷瀑がある。みな、夕食の材料を買いに行ったついでにクライミングを楽しむ。老いも若きもゲタ履きでアイスクライミングを楽しんでいる。こうなれば、昨年夏の合同アルバータ登山隊の副隊長であつたピーター・アマン夫妻らジャスパール在住のカナダ山岳会メンバーを夕食に招待するのは当然のことである。とても楽しい時間を持つことができた。

(増山 茂)

総務委員会

支部事務局担当者会議

二月二十四日(土)、二十五日(日)の二日にわたり、全国二十五支部から支部運営の要として活躍している事務局担当者(東京)に集まり、会議が開催された。

まず、大塚会長による「二十一世紀への提言―何を語り継ぐべきか―」を演題に会議が始まった。奇しくも当会と創立時期、会員数がほぼ同様というカナダ山岳会とアメリカ山岳会の明確なビジネスライクな会経営と、それに裏付けられた活発な活動運営の実態が紹介され、会務に携わるわれわれにとっても大いに参考となる内容の講演であつた。

次に、東九州、東海、京都の三支部によるテーマシンポジウムが高原

理事の進行で行われた。いずれも支部活動活性化の視点から事例が紹介された。

昨年の全国支部懇談会を支部創立四十周年事業と併わせて実行した東九州支部は、西氏より「これを推進するため、広く会員へ協力要請を告知した。これが事業の成功と支部全体に大きなよい刺激となつた」と報告された。

東海支部の星氏からは、支部の特色ともいえる海外登山の面から、様々な階層の会員が計画または参加できる登山計画の情報開示と、報告の徹底による情報共有は、活性化に役立つ要因、との指摘があつた。

第四回「秩父宮記念山岳賞」の推薦について

第四回秩父宮記念山岳賞の推薦を左記のとおり受け付けています。多数の推薦をお待ちしています。

一、表彰対象分野

イ 登山活動

ロ 山に関する文化活動

二、推薦方法

当初の「本人の応募と推薦者の推薦」という方法から、第三回より「推薦者の業績提出による推薦」と

秩父宮記念山岳賞審査委員会

いう方法に変更しました。

三、締め切り

平成十三年七月三十一日

詳細については「山」平成十二年

二月号の竹内哲夫副会長執筆の記事

「秩父宮記念山岳賞の見直しについて」をご参照ください。

四、問い合わせ先

日本山岳会内・秩父宮記念山岳賞

事務局

日帰りからキリマンジャロ、マッターホルンまで

全国ネットの山旅専門店！
安全で快適な山旅を、中高年
からお一人様までサポートしま
す。各コース経験豊富なツアー
リーダー同行で安心。

おすすめポイント！
人気の山旅スタイル。気軽に合流してください。

2000年秋からの

やませみクラススタート
大好評！初心者の方の山歩
き講座。各地発着のプランを
ご利用しました。

2001年度カタログも

ご予約ください。

アミューストラベル株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエビル B1

☎03(5325)1256 FAX03(5325)1258

大阪 06(6456)3366 名古屋 052(588)5617

福岡 092(414)5566 広島 082(502)2525

京都支部は内田氏より支部が企画する例会山行、交流山行と、参加時の山岳遭難保険チェック法や、マイカー利用時の費用清算法など、ユニークで合理的な管理システムが紹介され、活発な活動側面が窺い知れた。

これらに関連して各支部からも発言が相次ぎ「高峰に限らずテーマをもった登山を企画」宮城支部、「フアミリー向け登山やキャンプの企画に岩石、星、鳥の観察も含めて自然そのものを啓蒙」北海道、福井、広島支部、「月例山行はやめたが、一人では行けない登山を支部で企画」山形支部」などである。行事参加者の固定化傾向が全体的にある中で、新しい層の参加度を上げる工夫に活性化へのヒントがあるとの感を得た。

この後は会場を移し親睦を深めた。翌日は山岳会ルームに会場を移し、会務事項や事務局要望事項の伝達、確認、石川支部からは今年の全国支部懇談会のインフォメーションなどの情報交流を行い、二日間の日程を終えた。
(総務委員・遠藤源太)

三水会

現地集会・竹寺から子の権現

三水会は二月十、十一日、埼玉・飯能の竹寺で現地集会を催した。この時節になると、例外なく竹寺から

子の権現への山道を歩いており、今年で二十四回目、「こたわりの山行」である。

五十年前も前のことになるそうだが、坂倉登喜子会員が雪の中、この寺を訪ねて温かいもてなしを受けたとか。坂倉会員はそれが忘れられず、毎年足を向ける。いつの間にか三水会の例会として定着してしまった。

医王山薬院八王寺。竹林が美しい。みんなは竹寺という。名物の精進料理をいただく。器はすべて竹。俳句寺としても知られる。夕食後、天狗俳諧に興じた。偶然性を楽しむ遊びだが、すんなりまとまった句ができた。

竹寺の蠟梅そえし夜の膳
今年は雪が多かった。奥武蔵もそうだった。翌日の子の権現、西吾野までの散策は雪の中だった。参加者十五人。
(高橋重之)

自然保護委員会

「高尾の森づくり」体験記

昨年春よりスギやヒノキの除伐作業が始まった高尾の森づくりは、今回で五回目である。新年を迎えてからは、四月の植樹祭に向けての地ごしらえ作業に入った。

二月十七日に高尾の森林センターに九時に集合した参加者は、日本山

岳会会員を中心とした森林ボランティアが三十七名と、森林管理署の職員が四名と総勢四十一名の大所帯となった。参加者の確認後、車に分乗して小下沢林道にあるキャンプ場に向かった。林道は先月末の雪が残っており、ところどころに凍結の箇所もあって、なかなかスリリングなドライブだった。

キャンプ場に車を止めて身づくりをし、鋸、鋤、鉋や造林鎌などを持って作業現場に向かった。ヘルメットをかぶり、立派な道具を持てば、見かけはいっぱしの森林作業員である。

作業現場はキャンプ場より景信山へ向かう登山道を四十分ほど登ったところである。広さは約〇・五ヘクタール。雪が膝の高さほど残っており、果たして作業ができるのか危ぶまれる。刃物類の使用上の注意を受けた後、雪の斜面に取り付き、自主的に作業を始めた。作業は鎌や鋸を使って小木の刈り取り、鋤を使って作業道の作設、協力して倒木の除去、枝打ちなど。雪の中での作業と経験不足で何回か岩を刈り取ってしまったが、造林鎌を持つ手を休め、皆さんの作業を眺めると、なかなかスムーズにこなしているように見えた。無論森林管理署の職員の指導を受けながらにせよ、この活動も継続する

ことで徐々に作業に慣れてきたようだ。快晴に恵まれ、作業によつて体から発散される熱も、雪からの程よい冷気に冷やされ、快適に四時間の作業を終えることができた。

キャンプ場に戻り、豚汁を作つて食べ、今日の作業の反省を行い、植樹祭でどのような広葉樹を植えるか相談し、今後の予定を確認して解散した。帰りの車の中では、程よい疲れとさわやかな気分になりながら自宅へ向かった。充実感のある一日だった。

この活動は、原則として毎月第二土曜日に行います。気持ちのよい汗を流してみませんか。皆さまの参加をお待ちしています。(舟根 章)
*問い合わせ先 山川陽一(TEL. 〇四二・三七四・七一一六五)宛、電話、ファックス、Eメールアドレスを添えてご連絡ください。

資料委員会

版画二点寄贈

鈴木正俊会員(二四九四)より版画二点「ジタンゴ山晩秋」「檜洞丸山荘」をご寄贈いただきました。まことにありがとうございました。貴重なる作品二点は今後大切に保管し、ルームにて多くの方々にご覧いただきたく思っております。(鯉坂青書)

海外の山 江本嘉伸

ボカラ国際山岳博物館姿を見せる



これがボカラの山岳博物館 (2000年11月・江本・撮影)

核とした第一期に絞り、博物館スペースの外形は、すでにできあがっている。

進行は遅れ気味だが、「国際山岳年」の二〇〇二年十月にはオープンする計画だ。

一二・五エーカーという広大な敷地に入ると、まず、マチャプチャレ、アンナプルナ、ダウラギリといった山々が目の前に広がる壮大な景観に感動する。これらの山そのものが自然の展示物となっているのが、ボカラの強みだろう。

目下建物ができているのは、メインとなる博物館の展示棟だけで、ゲストハウスや管理棟などは、将来のことになる。

展示棟は、三つの部分に分かれている。ネパール・ヒマラヤそのものを紹介するコーナー、世界の山々をテーマとするコーナー、そしてその都度テーマを変えて展示する特設展示コーナーである。

当初は、山岳図書館棟を別に建設する計画だったが、当面は小規模の図書コーナーを、記念品コーナー、コーヒーショップなどともに併設することになった、という。屋根ができたので、内装は雨季に入っても可能だ。フランス人専門家の手でもなく始まる、と昨年暮れに訪れた

時、聞いた。

山岳博物館は日本にも大町や松本などにあるが、スケールの大きなヒマラヤの国にできる最初の博物館としてどんな展示を見せてくれるのか興味は尽きない。昨春秋、フランスで開かれた国際山岳連盟(UICA)総会でも、姿を見せ始めたボカラの山岳博物館の開館に向けて連盟としても全面協力することが確認されたそう。

で、趣意書にはこんな記述がある。

二八五六年のサガルマータ(エヴェレスト)の発見から、一九二四年のマロリーたちの挑戦と遭難、ティルマンのネパール・ヒマラヤ探検、そしてエルゾーグ隊の人類最初の八千メートル峰登頂とヒラリーたちのサガルマータ登頂……と、ヒマラヤで行われてきたさまざまな歴史的チャレンジとその成果を述べたあと、

六〇、七〇年代以降、八千メートル峰がどんどん登られ、それをサポートする地方の人々(シェルパやポーター)の増加で暮らしが変化したこと、環境問題が生じてきたことなどにも言及している。

同時に、ヒマラヤを歩く「トレッキング」の概念を持ちこんだグルカ士官、故ジミー・ロバーツのような人物についてもふれている(トレッ

キングとは、もともと南アフリカで牛車に乗って移動することだった)。登山と山歩きの現代史を回顧する、どちらかというと、オーソドックスな展示になるのかもしれない。

しかし、博物館のどこかに小さくともコーナーを設けてほしいのは、半世紀前と比べて毎年のように「市民化」の色合い、つまり誰もが行ける高所登山の傾向を強めつつあるヒマラヤの「いま」についての情報である。

とりわけ一九九〇年代になって急速に増えていった商業公募登山隊の進出は、好むと好まざるとに関わらず、ヒマラヤ登山のイメージを変えつつある。ネパールや中国政府が、多くのクライアントのヒマラヤ行を歓迎しているのだから、これからのこの傾向は強まるだろう。

その中から、登山情報の伝達そのものが様変わりした。各登山隊が独自のホームページを開いて情報発信するようになり、この春のヒマラヤも多くの登山隊が、インマルサット、ファックスつき電話、パソコン機器など情報手段を携行、それぞれの国と直接連絡をとりあっている。

山岳博物館の目玉のひとつとして、たとえば「ヒマラヤ・マロリーたちの時代」といふようなテーマで徹底比較を面白い展示で見せてほしい。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

ネパールのマオイストと旅行者の安全について

宮原 巍

ネパールでは、共産党極左集団であるマオイスト(毛沢東主義を標榜する反政府組織)のテロを含む活動が最近より活発化してきて、その実態は「山」六六八号、大関保氏の記事の通りであるが、ネパールで三十九年旅行会社をやってきた人間として、私もこの問題について触れてみたい。

彼らの活動がいまや国内で深刻な問題になってきていることは確かであり、一カ月前の二月十二日には、一九九六年から始まった活動五周年を記念して彼らが勢力をもつネパール中西部ルムク郡で大掛かりなダサイン祭を行った。本来、ダサインは秋九月末か十月に行われるイン

ド、ネパールでの古来からの年一番の祭事である。

ルムク郡はロルパ郡とともに、今ではマオイストの支配下にあるとさえ言われているほどで、彼らは擬似内閣まで組織し、一部住民の支持も得ている。こうした組織と活動がなぜ存続し得て、より活発な動きに発展してきているのかといえは、当然のことながら、政府に対しての不信や不満と、彼らの政治理念の遂行ということであろう。

マオイストの主張は、腐敗のない共和国家の確立と貧困層に対する教育機会の均等、自立した経済の確立、インドへの追従政治からの脱却、産業振興による雇用増大などである。その主張はよいことづくめだが、現在彼らが支持もしくは勢力をもち得ているのは、貧困の救済スローガンと彼らの暴力に対する住民の恐れか

らであるように見える。そして少ない例であるが、マオイスト活動に従わない人々たちを脅迫し、その人たちの財産を貧しい人々に与える、という方法もとっている。

ところで彼らが拡張した勢力分布は下図のごとくである。

マオイストは警察駐在所襲撃によって勢力を拡張してきたわけであるが、ちよつと理解に苦しむのはルム郡が彼らの勢力下といわれながらも、その郡に今も警察署があり、政府のガバナも駐在している。それがネパールらしさというべきか、このお互いの寛容さに一つの希望というか救いがあるのではないかといった気がする。

それはさておき、外国人旅行者がネパールを訪れるのは、危険という問題に対して私は次のように考える。

- ① 彼らの活動はあくまでも政治活動であり、テロ活動の対象は警察駐在所と政府の関係者に限られている。
- ② 警察駐在所の襲撃で過激な動きを見せる彼らの行動は驚きであるが、根本的には穏やかな性格の持ち主であるネパールの人たちのので、今後とも外国人旅行者に危害を加えることはないと考えられる。
- ③ 地域的にはカトマンズやボカラ

ネパール中西部のマオイストの活動が活発な地域
(斜線の部分)



の市街地、またはアンナプルナ周辺とジウムソン、ランタン、エヴェレストのあるクンブ地方はまず安全である。

旅行社の立場という偏った視点からあえて申し上げたが、地域を限り、よいガイドをつけるなど、それなりの手配をして行けば安全に旅行ができると言わせてもらいたい。だがマオイストグループをかたる略奪行為もあり得るので注意したい。

今後の彼らのテロ活動は、次のよ

うなことがなければ弱まることはないと考えられる。

① 政府が話し合いに積極的な姿勢を示し、彼らに民主的な方法をとるような道を開いていくこと。

② 内閣の改革で国民に自分たちの姿勢を正していく。実際のところ、ギリジャ・コイラ首相はラウダエアーのスキヤンダルへの関与が国会でも問題になっていて、マオイストへの対応に手が回らないといった現状と、そうしたスキヤンダルまみれの政権自体がマオイストが勢いを増してくる土壌となっている。

政府の適切な対応があつたとしても、少なくとも三年半後の選挙まで、彼らの活動は進展してゆくと考えられる。

最近思うことは、政治が貧困であると、国の貧困を招くということである。一昔前と違つて自然の条件が悪いとか、資源・資本・技術・マーケットがないことが、その国の貧困の決定的な要因にはならないと思う。ネパールには他の国に類を見ない素晴らしい自然がある。かつて観光産業は不急の産業などと言われたが、いまや立派な地位を占め、それと関連する食品・流通・建設・情報産業など多方面にわたつての経済的波及効果をもたらしていると思う。

マオイストのような暴力的な手段を取らないで、かつ国を混乱に陥れないで、ネパールはこうした問題を乗り越えてもらいたいと切に願うものである。

山の絵の路線論争

松丸秀夫

山の絵はいかにあるべきかとして昭和十一年から十六年にかけて日本山岳会会報紙上で山の絵の路線論争が活発に行われた。……山岳画はただの風景画なのか、それとも独自の境地にあるものとするのか、との路線論争である。

このような論争が行われた当時の時代背景を考えると、第二次世界大戦直前の戦時色一色の騒然たる時であり、物資は不足し、人々は戦争という一字に取り付かれたように生きていた。その時代に山の絵の路線論争という文化論が、山岳会会報紙上で堂々と戦わされた事実。まさに目を見張る思いがする。

そして現代、われわれは豊穡の世界に生きていて、スポーツも文化活動もまことに盛んで、大勢の人々が山に登り、絵を描く時代になった。山の絵もプロ、アマチュアを問わずたくさんの人々が関与している。

しかし、今現在、山の絵の路線論争などが戦わされたことがあるのだろうか。そんな思いから、当時行われた山の絵論争のいくつかを抜粋して記してみた。

*

昭和十一年一月に日本山岳会会報を主にして日本山岳画協会が設立された。

日本山岳会会報No.五五(昭和十一年三月)に中村清太郎が日本山岳画協会の設立について：を書いている。

「この協会の規約に、山岳を崇敬愛好する」という文字を掲げているが、個性を尊重すべきは勿論ながら、そういった気持ちがあれば殊に山岳画というような芸術品は出来るものではないと信ずるのであります。山岳画を大体、風景画の一種と見ても、その主題たるあの大地の、高揚した天辺の気高き、壮大さ、不思議さ、力強さ、その美しさには格別のものがあると思います」

中村清太郎はさらに会報No.八五(昭和十四年三、四月)に述べている。吾が山岳画道：「画は好きだった。併かし自然はもつと好きだった。……とにかく尋常でない渴きかたで自然にすがって行くと、おのずから山に入っていくのだった。……何を描こうとも、それは神の姿であるべきだ。況や山をや。……自分にとつて山は

絶対者である。……

その美を讀え、その神を伝え、その徳を宣べんとするのが自分の解する山岳画の理想である」

画家には圧倒的な巨人が存在する。その人が山岳画を描く人でなければ違ふ意見も出てくる。

高橋文太郎は会報No.一〇七(昭和十六年七月)に次のように書いている。

山の絵に求む：「自分は山の絵が好きだったからセガンチーニの画集などよく首引きをしたものだが、マチスとかルオーあるいはドランなど一流の作家などの作品を見るようになって、誠にたとえセガンチーニのものでも、つまらない感じがしてきたのである。

セガンチーニの絵には、山麓の生活をよく味わった深さがある。しかし結局、絵の美しさと言うものは、その題材にはよらないのである。

山を扱った絵よりも、他のモチーフのもので、より美しいものがあれば、私は後者のほうに心うたれる」さらに異なる意見が会報に出てくる。古田彰は会報No.一〇八(昭和十六年八月)に次のような意見を述べている。

山の絵私見：「私はセガンチーニを人ほど好きではない。私は……ルオーやピカソの近代の連中は好きで



チョーユー頂上から見たエヴェレスト、青木正次・画

あり、又甚だしいと思っっている。然しそのためにセガンチーニが悪いとか、つまらないと思っったことは一度もない。

私は安井曾太郎の霞沢や藤島武二氏の台湾の山……こういう人達が如何に達筆に山を描いたとしても、私はこれは山の絵だとは思わない。

安井氏が如何に穂高の天ペンで描いたとしても、これは山の絵にならないであろう。……

昨年の山岳画協会展で、私は石井(鶴三)先生に『これはどうですか』と聞いた。すると先生は『これはなかなかいい絵です。然しこの人は絵は



武田任夫・画

うまいが、山は浅いです』と言われた。これは山の絵と言うものがどんな条件のものであるかを説明して余りあるものと思う。

高橋文太郎は前記山の絵に求むの三カ月後に前文を補足するような意見を述べている。

山の絵続記：会報No.一一〇(昭和十六年十月)「この作家は『絵はうまいが山は浅い』といった評言を耳にする。言うまでもなく技巧だけが特にうまくて、精神の伴はないものが多い。いわゆる悪達者のたぐいに他ならない。

山が浅いということは、その画面から感ずる山に深みがないこと、延いてはその作家の山への経験や思索が足りないということまで含めて考へられる。とにかく、絵が上手であるばかりでなく、その画面から、山が観る者の心を打ってこなければなら

は広く理解できなければならないことであって、アマチュアの手の届かないことではない。

高峰の頂上から、あるいは新雪の中、烈風にさらされながら描く絵であればこそ、人々の感動を呼ぶのである。

アマチュアは広い価値観を持つことができる。そしてアマチュアが真骨頂を発揮する山の絵もある。

私は昨年(二〇〇〇年)、チョー・ユー八一五メートルの頂上から描いたエヴェレストとシシヤパンマの二枚の青木氏筆の絵を見る機会を得た。一号のスケッチブックにデルマトグラフで簡素に描いてあったが、八〇〇メートルを越える頂上から描いた絵としては世界初らしいと伝えられたこともあって、見る人に訴える迫力十分な力作であった。

わが国には山岳を崇敬する精神的

文化遺産があつて、日本山岳会の設立の趣意書は山岳崇敬の文字で満ちている。

登山による精神の高揚と山岳崇敬は山岳画に欠かせない要素である。

私が所属している同好会のアルパインスケッチクラブは、指導者をおかず、それぞれの感性のもとに山の絵を描いているグループであるが、毎年一回行われている展覧会の展示をめぐって幾度となく論争が行われてきた。

「日本山岳会のアルパインスケッチクラブなのだから、山に登った喜びや感激をその場で作品化することに第一の意義づけを行うべきである」

「山が好きながことが共通項なのだから、どこから何を描いてもよい」

「あんまり大きな作品はアルパインスケッチクラブの展覧会にふさわしくない」

「山に登り絵を描いていけば油絵に入り、大作になるのはあたりまえである」

「山の絵の絵描きさんのグループではない」

こんな論争も当時の山の絵の路線論争の一端をかすめているような気がするし、これからもアルパインスケッチクラブの求めるもの、忘れてはいけぬものについて路線論争をやってほしいものである。

マッキンリー 登頂の代償

学習院大学山岳部・内野麻衣子

手術室に入ると音楽が流れていた。それは偶然にも、マッキンリーでいつも聞いていた曲と同じであった。私は凍傷で真っ黒になった指先が切られていくのを見つめながら、マッキンリーでのあの素晴らしいひとときを思い出さずにいられなかった。

一九九九年六月、日本山岳会主催の第十次マッキンリー気象観測機器設置登山隊に参加することになった。私は、一週間前にドタキャンされてしまった。人数が多すぎて許可が下りなかったという。九月には心を入れ替えて大学のレッドメイン遠征へ出発したが、自分の未熟さから思うような結果は出せなかった。悔しかった。レッドメインは貴重な体験がたくさんできたし勉強にもなったが、心がすつきりしなかった。やはり山は登頂しなければ、とその時思った。

帰国後はビッグイベントが終わった後の無気力感を味わい、一度は退部も考えたが、また山へ行きたくなった。その後、富士山雪上訓練、槍ヶ岳冬山合宿、二月には友人と気楽なキナバル(マレーシア)登山をした。二〇〇〇年二月末、再びマッキン

リー行きの話が舞い込んできた。それまで半ばあきらめていたのが、話を聞いたとたんに血が騒ぐ感じがした。私の中で様々な感情がメラメラと燃えていた。

三月は瀧沢岳西尾根から奥穂高岳への春山合宿。私にとっては辛い合宿であった。体調不良のせいもあるが、やはり体力不足。これではマッキンリーに登頂できないと思い、毎日トレーニングし、富士山に行つて山頂に泊まったりもした。

そして迎えた二〇〇〇年六月七日、いよいよ出発の日。社会人四名、学生五名の合計九名の隊は成田を後にした。アンカレッジに着き二日間の準備、梱包の後、タルキートナからセスナでランディングポイント(二一三四メートル)まで移動する。今にも落ちそうで生きた心地はしなかったが、外の景色は素晴らしかった。動物の王国であるツンドラ地帯から真っ白な氷河地帯へ、山々をすり抜けて見えてきたのは、とにかく大きく白いマッキンリーであった。本当にこの山に登れるのだろうか、という不安とともに、今度こそ絶対に山頂まで行つてやる、と誓った。

隊の雰囲気はよく、和気あいあい。右を見ればハンター峰、左はフォレーカー、真ん中にマッキンリー。そんな中、分厚いステーキにビールとくれば、こんなぜいたくはない。最高に幸せだ、と思つていたのもつかの間、いよいよ重荷を背負い登山開始だ。氷河歩きはヒドンクレパスが至るところにあるため、スキーを履き三人ずつアンザイレンして歩く。しかし皆ほとんどスキーを履いたことがない。気合を入れて出発したものの、歩いて数分の下り坂で、後に引いている機に追突され、右にパタ、左にパタ、前にドテ、と一人また一人、とうとう隊長以外のすべての人間が転び、あえいでいるという状態、全然進まない。それでも二時間も経てば慣れてきて、うまく機を引きながら歩くことができた。スキーは三五〇メートル地点にデポ、そこから上部はアイゼン、ピッケル歩行だ。そろそろ標高も気になってくる。

六月十四日、四三三〇メートルにBCを設営する。心配していた高山病は出ず、食欲も睡眠もばっちりで一安心。BCは快適そのもので、トイレもあり、メデイカルキャンプもあった。何といつても景色が最高で、雲の上の王国であった。

BCからAC(五二五〇メートル)までの荷揚げは大変に辛かった。慣れないスキー歩行のため、かかとに靴擦れの大きな水ぶくれ。そのかかとで五〇度の急登は痛かった。そのうえ頭は心臓の鼓動に合わせてガン

ガンと痛い。歩くのもやっと。荷揚げに行つたにもかかわらず、荷を持ってなくて迷惑をかけてしまった。でもBCに戻ったら、頭痛がスーッと消えて楽になった。

六月十九日、AC入りのこの日、高山病は全く出ない。気象は一段と厳しく、夜の気温はマイナス三〇度以下になる。ACに滞在できるのは三日間。しかし二日経つても天気は回復しない。「明日は晴れてくれ」と懇願して眠りについた。

六月二十一日、晴れた。いよいよだ。待ちに待った日がきたのだ。日本から大切に持ってきたリポビタンDとアリナミン四錠、アミノ酸をぶち込み(効き目がどうこうよりも気休め)、いざ出発。一步一步ゆつくり登つてゆく。五七一〇メートル地点に設置してある気象観測機器の回収作業(これが隊の目的)をし、終了後山頂を目指して歩いた。だんだん雲が湧いてきて、あつという間にガスに包まれてしまった。景色が見えないのは残念だったが、「数時間後に私は最高の感動を味わえるのだ」と思うと、息苦しさも天気の悪さも山頂に立った自分を想像して何の苦にもならなかった。絶対に登頂してやる、絶対に登頂してやる……、と念じながら歩いた。

十七時四十五分、視界はゼロであ

ったがついに山頂へ到達した。この瞬間をどれだけ待っていたか。「ヤッター」と大叫びし、握手を交わす。大蔵喜福隊長と抱き合い、心の底から嬉しくて泣いた。この「登頂」という感動を味わいたいがために、今まで頑張ってきたのだ。

登頂の代償が凍傷。あの時自分の指が凍傷になっていたとは思ってもしなかった。それは私の甘さであるが、気づかないほど必死だったとも言える。手術台に横たわり、血まみれの指を見ても、頂上の瞬間を思い出すと頬が緩んでしまう。それほど私にとってマッキンリーの登頂は意義のあることであつたのだ。

*青年部の機関紙『きりぎりす』より転載しました。

ボリビア日記・1 クライミング事情

増山 茂

某月某日、朝十時にマリオが迎えに来る。マリオはボリビア山岳会のゼネラル・セクレタリー。ロッククライミングを毎週末楽しんでおり、岩場の解説書を出しているペテランである。先日ラパス近郊の岩場の写真を見せられ、週末にはぜひいつてみようかと誘われたのである。

車でお鉢状のラパスの町を下ること十五分。ラ・フロリダ地区からリオ・デ・ラパス川をちよつと下った標高三〇〇〇メートルほどのアモール・デ・ディオス近くの岩のゲレンデへ。乾いた砂と日干し煉瓦の中に高層ビルがちぐはぐにそびえ立つセントロ(ラパス中心街)とは違つて、ここには背の高い緑の木々と花崗岩の岩場が溪流に区画されている。セントロのごみごみした宿からくると、規模は小さいが、ほつとする場所だ。

こころラパスでは下に降りれば降りるほど居住環境は高級とみなされる。このあたりにはゴルフ場もあるし、もう二〇〇メートルほど下つたサン・ミゲル地区は外交官などの住む高級住宅地である。

岩場群の入口にある独立した高さ一二、三メートルのややオーバーハングした岩が格好の練習場となつている。トップロープで多くの若者が楽しんでる。各ルートにはフレンチグレードで6a、b、c、dなどと書いてある。ラパス在住の外国人も多いようだ。スイス、フランス、アメリカなどなど。マリオによれば、ボリビアでクライミングが盛んになったのはここ十年くらいだという。これにはフランスが大きく与つている。何年前か、ラパスのフランス大使館がシャモニーからクライミング

の講師を招請し、ラパスのクライマーを系統的に教育した。岩場の整備も行い(それこそ系統的にボルトがそこらじゅうに打たれている)、ガイド資格も与えるようにした。ワイナポタシでのアイスクライミングフィールドも開発、スキー技術もあわせて訓練を行った。訓練でもっとも優秀だった二人が選ばれて、シャモニーの登山学校で二年間学ぶことになり、国際ガイド資格をとつて帰国。そのうちの片割れが、私が昨日シューズとハーネスを買つた登山用具屋のおやじであつた。ちなみにもう一人はフランスに住み着いて帰つてこないのだそう。

フランスもなかなか味な援助プロジェクトをやるものである。日本はいえ、結局はこちらの政治家の懐に入つて消えてしまうODAを飽きることなく繰り返しているばかりである。

しかし、経済が破綻したこのボリビアで、何十ドル、何百ドルもするクライミングギアを購入でき、週末に車でゲレンデに乗り付けることができる層はほんの一握りの上層部の子女か、外国人に限られる。クライミングはここでは高級な遊びである。日本を含む外国人ツーリスト、トレkker、クライマーをこのクライミング・フィールドに呼び込むべく彼

らは躍起になっている。

さて、われわれは十分ほど離れた岩にとりつく。シューズとハーネス以外、ロープや確保器やスンチャクなどすべてマリオに依つてゐる。

病後の私は、右手のグリップ力は左の半分、右足だけで立つのはまだ怖い。もちろんトップでは登れない。もつとも簡単などころはなんとか登れたが、微妙で面白いと言われた6aのフェイスは、最後には右足で立てなくてかつ右手がいうことを利かなくなりフォール。5dの簡単なオーバーギミなどころも右手で引つ張れなくてよじ登れずフォール。上部では右足に煙草がくる。

手足が擦り傷だらけになつてきんざんな結果だったが、しかし岩場に取り付けただけでも喜ばねば。昨年八月のティートンでは、最後にサドルに上がる(フィックスされている)ほんの簡単なピッチですら恐くて登れず、ロープを結んでもらつた。室内でだつて右足だけでは立てないのととても恐いのである。秋のアコンカグアにはクライミングするところなどなかったが、ちよつとした岩の上り下りにさえ実は細心の注意を払わねばいけなかつたのだ。

マリオは辛抱強くつきあつてくれた。リハビリのトレーナー役をやつてもらつたことになる。ありがとう。

第4回会員アンケート結果報告・1

会員アンケート実行委員会

昨年10月末から11月にかけて、既にご承知のとおり全会員を対象とした会員アンケートを実施しました。アンケートは、会員の皆さまの構成、意向などを広く調べ、会の長期的な改善計画づくりや事業計画作成などの「基礎資料」として、大いに有効活用することを目的にしています。多くの会員のご協力によって54パーセントの回答を得、集計ができましたのでそのあらましをご報告します。

会員アンケートは過去3回実施されており、1972年は回答率32パーセント（発送数2364、回答数766）、1983年は回答率45パーセント（発送数3900、回答数1755）、1989年は回答率51パーセント（発送数4442、回答数2251）を記録しています。

4回目の今回は会員の皆さまの参画がさらに進んで、回答率は54パーセント（発送数5983、回答数3255）という高率に達しました。会員の半分を超える方にお答えいただいたことになり、会員の皆さまの参画意欲の強さと意識の高さを如実に物語っているといえましょう。

アンケートの設計に当たっては、次の3点について特に留意しています。

①会のビジョン作りや改善の仮説をできるだけ検討できるようにする（“単なる参考”という

質問は省く）

②過去のアンケートと時系列分析が有効なものは踏襲する。

③前回から11年が経過しているので、時代を反映した質問項目（例・インターネットの利用）を新たに加える。

したがって、「登山の体験をいまさらなぜ聞くのか」、「以前に答えたことをなぜ繰り返し聞くのか」といった疑問をもたれた会員もおおいになると思いますが、上記の三つの留意点を勘案してあるためですので、ご了解をお願いします。

コンピューターを使って様々なクロス集計を行っていますが、この紙面を借りて、ベーシックなデータを報告し、会員の皆さまの参考に供したいと思います。

（西村政晃）

実行委員会

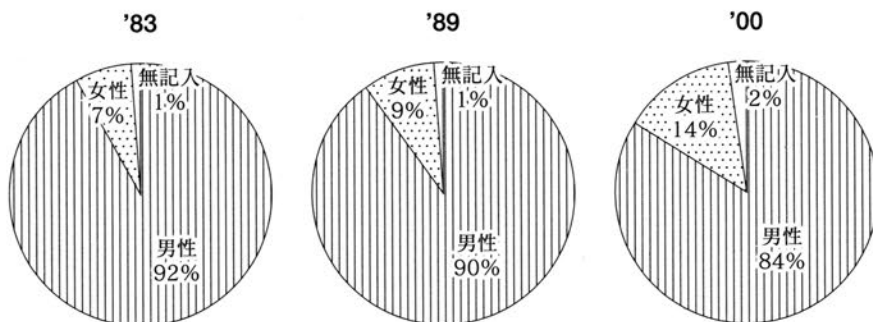
委員長

委員

西村 政晃
村井 龍一
森 武昭
宮崎 紘一
村井 葵
高原 三平
遠藤 源太

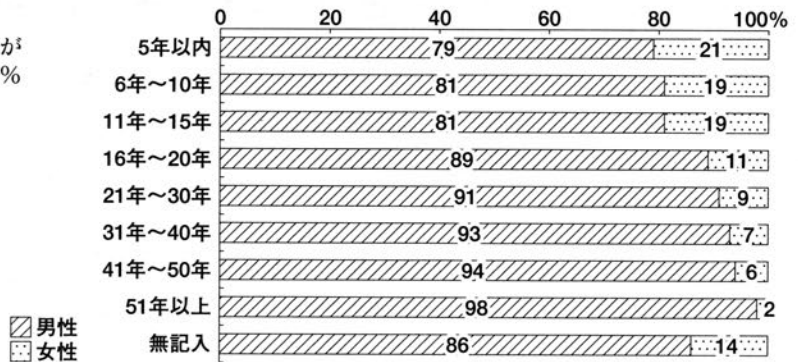
1. 会員の男女別構成

女性が14%を占め、前々回（'83）、前回（'89）に比べ大きく増加している。ただし、世の中の登山人口の女性の占める比率に対しては極めて小さい。



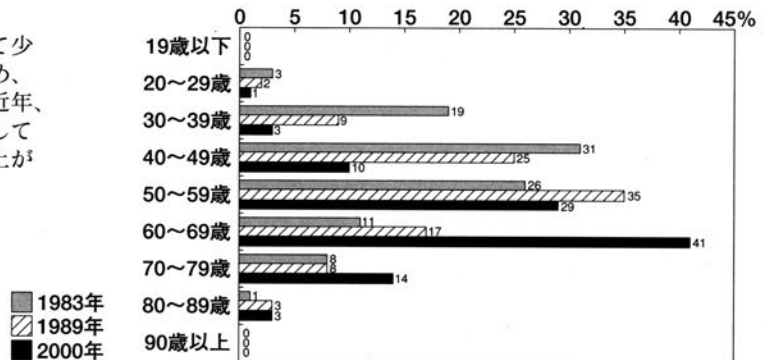
性別在籍年数

在籍年数の少ない会員ほど女性の構成比が高い。在籍5年以内の会員では女性が21%を占めている。



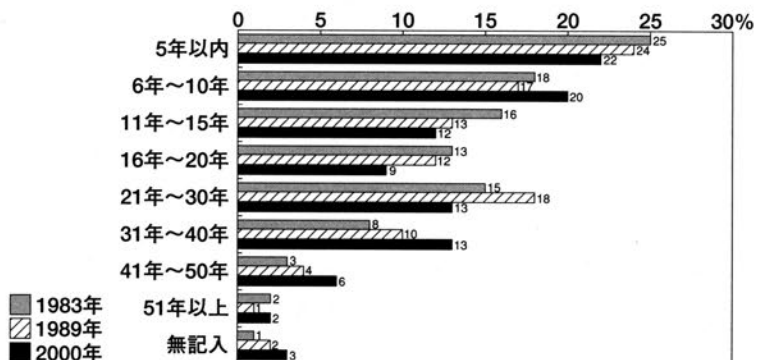
2. 年齢構成

10代～30代合わせて4%と若い人が極めて少ない。50代以上が87% (前回63%) を占め、回を追って高齢化が進んでいる。これは近年、入会者の年齢が高くなっていることに起因している (在籍年数5年以内の会員では50代以上が78%)。



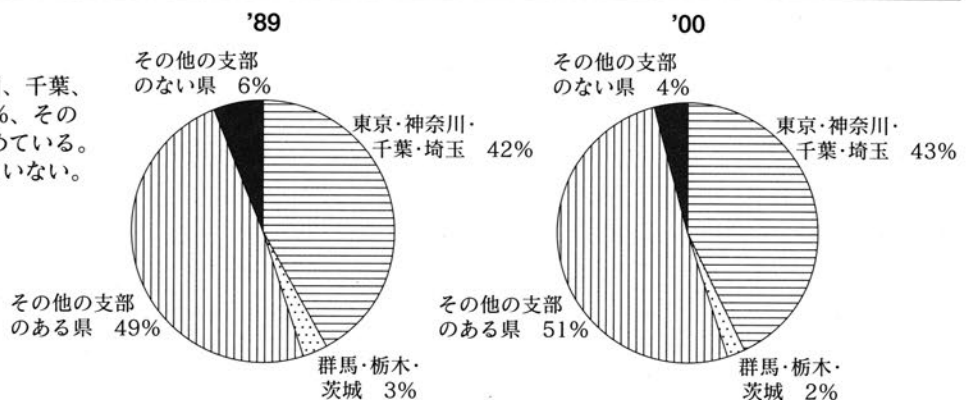
3. 在籍年数

在籍の長い、31年以上の会員が21%と多くなっている。



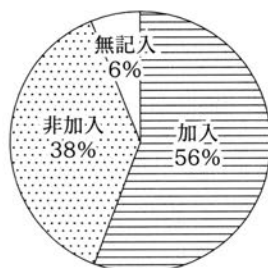
4. 住所

首都圏 (東京、神奈川、千葉、埼玉) の居住者が43%、その他の地域が57%を占めている。前回とあまり変わっていない。



5. 支部への加入状況

支部の加入者は全会員の56%を占める。支部のある都道府県の会員のうち92%が支部に加入している。



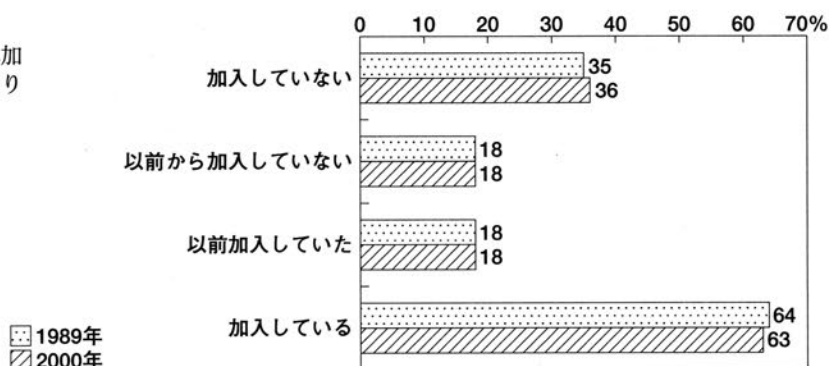
ブナの若芽(白神山地で採取した種子の発芽)

撮影・栽培 大森弘一郎



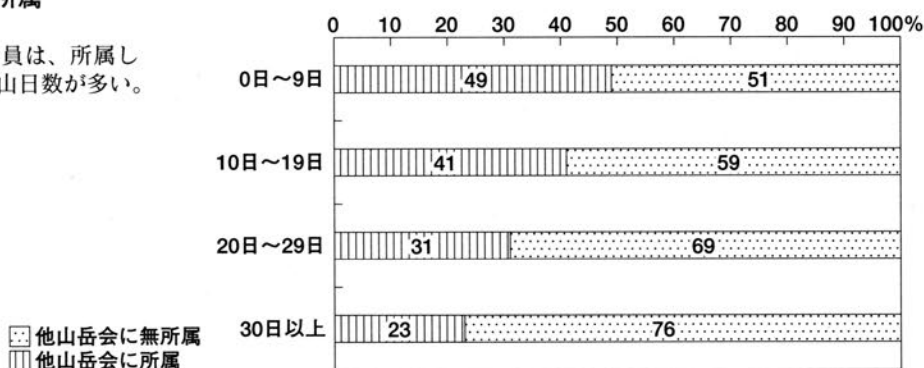
6. 他山岳会への所属

63%の会員が当会以外の他山岳会へ加入している。この比率は前回とあまり変わっていない。



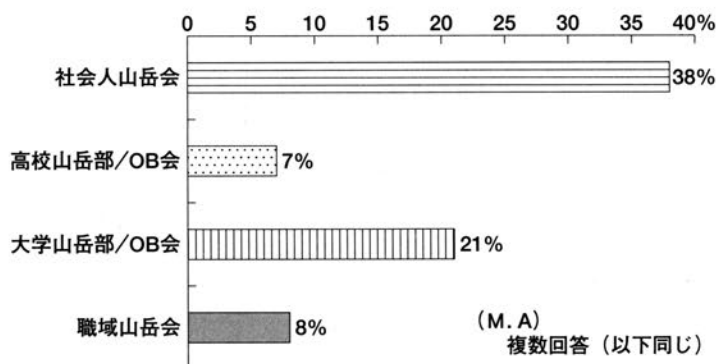
年間登山日数/他山岳会所属

他山岳会へ所属している会員は、所属していない会員に比べ年間登山日数が多い。



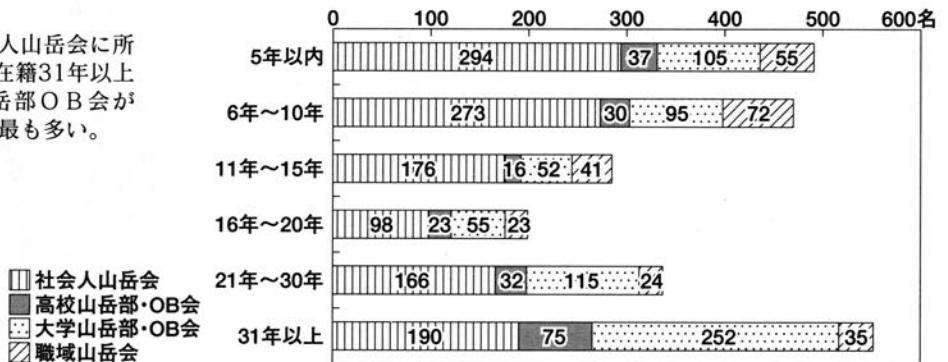
7. 現在所属する他の山岳会

社会人山岳会が最も多く (38%)、大学山岳部/同OB会がそれに続いている。



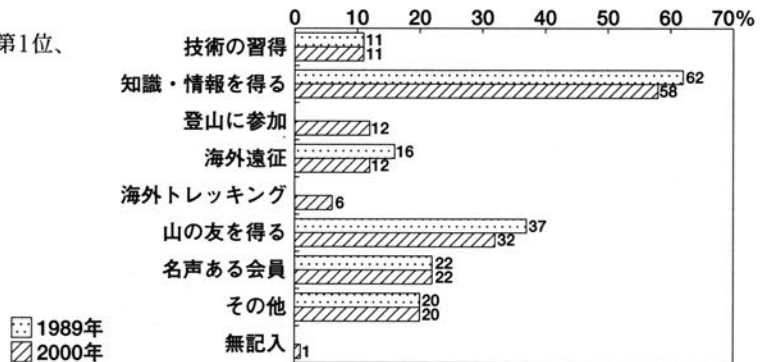
他の山岳会所属／在籍年数 (実数)

在籍年数が短いほど社会人山岳会に所属している会員が多い。在籍31年以上の会員を見ると大学山岳部・OB会が256名(37%)を占め、最も多い。



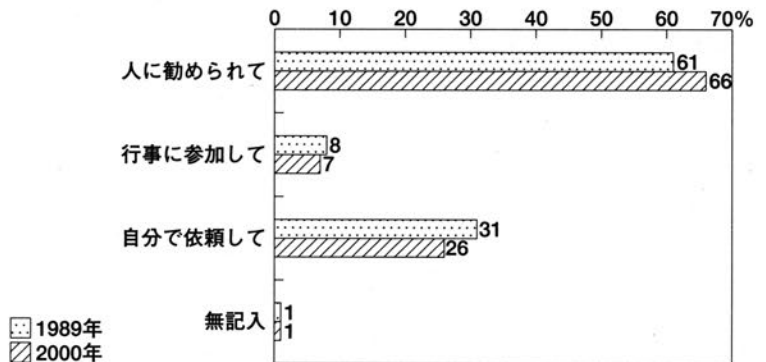
8. 入会動機

入会動機は「知識・情報を得る」が58%と第1位、「山の友を得る」が32%で第2位である。



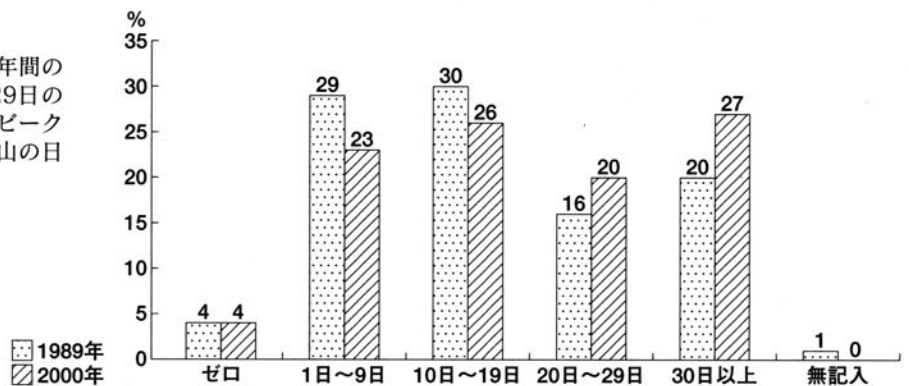
9. 入会のきっかけ

入会のきっかけは「人に勧められて」が66%で最も多い。



10. 登山日数

前回('89)と較べると、5年間の平均年間登山日数が20～29日の4ポイント、30日以上へのピークライマーが7ポイント、登山の日数が増えている。



図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

中村保・著

『深い浸食の国』

読み進んで、心踊る本というのは滅多にないが、本書は六十歳を越えた壮年探検家の手になる、知的刺激にあふれた一書である。

深い浸食の国とは、ヒマラヤの東、長江、メコン、サルウィン、イラワジ、プラマプトラの五つの大河の源流部が接して流れる、急峻な山岳地帯、いわゆる「横断山脈」のことだ。京大隊の遭難で知られる梅里雪山は有名だが、広大な山域のほとんどはまだまだ空白部になっている。著者は二十回以上にわたり、この地域に足を運び、五年前には「ヒマラヤの東」

を出版して注目された。今回の本は九六年から二〇〇〇年までの八回の紀行を中心に、まとめている。可能な限りの資料を読破、吟味して、優れた現地案内役を友とし、好奇心むきだしに奥地に迫って行く行動力に頭が下がる。山域の紹介だけでなく、一世紀前「身命を惜しまず」の一文を残して消息を絶った東本願寺の学僧・能海寛の終焉の地の究明、この地域での英、仏の探検家や宣教師の足跡追跡など過去の探検家たちの業績を掘り出してゆくスリリングな手法は、刺激的だ。著者のこの山域に関する英文報告は、素晴らしい写真とともに英、米の登山家たちの間でも高い評価を受けていることを付言しておく。

(江本嘉伸)

『ニュージーランド・アルパインジャーナル2000』

ニュージーランド山岳会の機関誌(五二号)。項目は国内の岩と氷、海外、意見、国内地域近況に大別され、写真も豊富である。

「国内の岩と氷」では日本と違って氷河を有するニュージーランドの山々の登山が語られうらやましい限りだ。なかでも、タスマン海の渚から森林帯を抜け、数日間かけて自転車と足で氷河のタスマン頂上に登っ

た二人の若者や、Eメールで公募した三チームで三日間の高峰登山を競った報告など、今までになかった登山方法が詳しく書かれており、これからの登山の参考になる。海外」では各大陸の高峰に出かけているが、ネパールのアマダブラム・プモリの登頂や、カザフスタンの天山での登山、シベリア・アルタイの山行、ブータン北部山岳横断の旅、そしてアイスランドのスキー行が目

「国内地域近況」はマウントクックなど五つの山域についての最新情報を地元代表が寄せており、貴重な情報を提供している。冒頭の山岳会役員表の中に「ニュージーランド、スポーツ・クライミング連盟」担当役員の名があり、スポーツ・クライミングへの積極的な取り組み姿勢がうかがえる。また全編を通してわれわれに馴染みのあるマウントクックを記す際に、随所でAoraki/Mount Cookと併記され、国内の山名について現地名尊重の動きを知ることができる。(南井英弘)

New Zealand Alpine Club 発行
変形A4判 一三六ページ

新ハイキング選書

『第4巻』 改定第2版 一等三角点のすべて

多摩雪雄編 B6判・350頁・定価1995円(税込)

都道府県別に一等三角点を地図上に明示。一等三角点の詳細な解説、一等三角点研究の決定版。

『第9巻』 第3刷 一等三角点の名山100

B6判・336頁・定価1632円(税込)

100山すべてコース図と写真入りで実用性が高い。

『第18巻』 改定第2版 一等三角点の名山と秘境

A5判・340頁・定価1837円(税込)

全国一等三角点の地方別の配置図と全国の一等三角点の総覧が附いている。一等の山100座を紹介。地図が大きく見易い。

『第20巻』 一等三角点の山々

A5判・310頁・定価1680円(税込)

一等三角点の山シリーズ。280山の総索引と高度順一等三角点100座が付いている。80座を紹介。

第9巻、第18巻、第20巻のガイドの山は重複しません。

新ハイキングの見本誌はハガキで申し込みれば無料で送付します。

新ハイキング社 〒114-0023 東京都北区滝野川7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110

三浦章男・著

『陸奥の屹立峰・岩木山』

題名は「みちのくのひとりたつみね」と読む。津軽平野に立つ孤高の峰に魅せられて岩木山に登り続けた人の、随想と記録をない交ぜにした報告の集成である。

日本山岳会の会員で、パミールに遠征したこともあるが、登山行為の対象はこの山をおいて外にないと言わんばかりに津軽富士に執着し続けてきた筆者の三冊目の文集は「山のはなしあれこれⅢ」の副題を持つ。一般的で抽象的な山の話でなく、岩木山一筋に打ち込んでいる人の心情と行動の記録としてのユニークさを持つ。

戦後に大陸から引き揚げてきて異邦人扱いされた少年時代に魂の救いとなってくれた岩木山への深い思いを根底として、山と人の結びつきが生まれ育ち、時を経て登山そのものの喜びへと昇華する。そのような個人的な感慨をにじませつつ、雪や雷の危険について、あるいは熊や鳥の生態について、登山道の荒廃と整備および自然保護について等々の体験に即した報告と見解が語られる。とりわけ、地元の高校に勤務して山岳部の顧問でもある人としての、高校生の集団登山や生徒をしたがえて

の登山を報告する部分が、量的にはわずかであるけれども、教育現場での登山指導にかかわりを持つ者にとって興味深く思われるだろう。

登頂した峰の数と高さが話題にされがちな風潮を超越する登山者の独自のスタイルを本書がものがたる。

二〇〇〇年十一月 北方新社発行
四〇〇ページ 二千元 (宮下啓三)

古谷聖司、泉久恵・編

『丹水』三号 (二十周年記念誌)

会の創立二十年で第三号、しかも二百余ページの会報とあつて驚かされる。

内容も丹沢山地(塊)を主体に、というよりは限定されているので、よくまとまっている。主力になっている会員はもとより、周囲の丹沢に関係のある人、たとえば山小屋の経営者、森林や植物に関係した人、地質に関した人、地形図に携わった人などなど、等しく丹沢を愛した人たちのなかで、どこを読んでも気持ちよい。集会ごとの写真も大きく鮮明だし、ほかにも写真がふんだんに入っているの、一冊の山岳書を見るような快さがある。

(川崎精雄)
二〇〇〇年二月 日本山岳会丹水会発行 二二一ページ

ルーム日誌

2月	青年部 総務(委)
1日	総務(委) 学生部
5日	集会(委) 自然保護(委)
6日	アルパインスケッチ(ク) 00
8日	同期会
9日	資料(委)
13日	常務理事会 アルパインスキー(ク) アルパインスケッチ(ク)幹事会
14日	理事会 会報編集(委) ジャック93会 99同期会
15日	科学(委) 学生部 フィルムビデオ(委)
16日	総務(委) 山学研
17日	評議員会
19日	総務(委) 図書(委) 山げらの会 二火会
21日	山研(委) 三水会 アルパインスキー(ク) 97同期会
22日	青年部 インターネット(小委) フォトビデオ(ク) 98同期会
23日	総務(委) 緑爽会
26日	財務(委)
27日	自然保護(委) 95同期会
28日	図書(委) 高所登山(委)

2月来室者 631名

図書受入報告 (2001年2月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
串田孫一	若き日の山(Yama-kei Classics)	237pp/20cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
北山真(編)	フリークライミング日本100岩場(3):伊豆・甲信	175pp/21cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
岡田徳右衛門順一(写真)	写真集「GINREI」:氷雪の立山室堂平	/31cm	桂書房	2000	著者寄贈
斎藤晋	詩集「雪原のキツネ」	86pp/20cm	紙書社	2000	著者寄贈
仙台一高山の会(編)	コズサル登山隊1999報告書	115pp/26cm	仙台一高山の会	2000	発行者寄贈
日本山岳会青年部(編)	カンチエンジュンガ登山隊1998報告書	177pp/26cm	日本山岳会青年部	2000	当会発行
追悼集刊行委員会(編)	追悼中島寛:天地ある限り	340pp/22cm	追悼集刊行編集委員会	2000	平尾光司氏寄贈
古谷聖司・泉久恵(編)	丹水(第3号):丹水会20周年記念誌	211pp/21cm	日本山岳会丹水会	2001	発行者寄贈
熊谷樞	晴れのち曇り 曇りのち晴れ(平凡社ライブラリー No.384)	311pp/16cm	平凡社	2001	出版社寄贈
紫蘭会(編)	マディラ島トレッキング報告:2000年紫蘭会25周年記念	54pp/26cm	紫蘭会	2001	発行者寄贈
紫蘭会(編)	紫蘭の四季:紫蘭会25周年記念・秋冬号(No.82)	90pp/26cm	紫蘭会	2001	発行者寄贈
Deutscher Alpenverein	BERG 2001 (Alpenvereins Jahrbuch Band 125)	329pp/26cm	Deutscher Alpenverein	2001	発行者寄贈
Korean Alpine Federation	2000 Korean Seven Summits Expedition Report	516pp/26cm	Korean Alpine Fed.	2001	発行者寄贈

会務報告

二月理事会

日時 二月十四日 十八時三十分

二十一時十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 大塚会長、小倉、大森、

竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮

崎、高原、村井(葵)、宮下、河西、

松原、高遠、勝山、鰐坂、坂本各理

事、中村、神崎各監事、中川、平山、

平野、吉永各常任評議員

「委任」 坂井、増山各理事、田邊常

任評議員

【審議事項】

一、平成十二年度海外登山基金助成
について(大森副会長)

本年度は三隊より申請があり、海

外登山基金委員会を一月二十二日開

催。助成案が決定したので提案する。

①ガッツシャブルムⅠ、Ⅱ峰(八〇

六八、八〇三五メートル) 明治大学

山岳部・炉辺会 助成金額五十万円

②サンルン峰(七〇九五メートル)

日本大学校門山岳会 助成金額五十

万円

③ロートツエ南壁(八五一六メート

ル) 日本山岳会東海支部 助成金額

六十万円 (承認)

二、平成十二年度期末推計と十三年
度収支予算編成(村井龍)

別添資料により説明があり、併せ

て、当会の定期預金が一銀行に片寄

っているのので、財務委員会で分散す

ることを検討し、提案したい。

(継続審議)

三、特定預金「図書出版研究基金」

の「長期計画準備立金」への振替

について(村井龍)

①基金づくりに尽力していただいた

会員に敬意を表する。②当会創立百

周年記念事業に活用した時には、あ

らためて表明する。

(以上の二点に留意し承認)

四、戦前の「山岳」の復刻(西村)

別添の「覚書」の内容について、

法律家の意見を聞き手直しすること

で応諾する。ポイントは次の通り。

手直した「覚書」を三月理事会で

報告。

①雑誌のままの復刻だが、著作権問

題発生の有無を確認する。

②十二項がダブリにつき訂正する。

③十二項については、損害賠償の甲

乙協議が分かりにくい。二つに分け

るよう改める。

④自動更新の定めは止めて、「乙が甲

に申し出た場合」に改めることを検

討する。

(承認)

五、平成十三年地球環境基金助成

金交付の申請(河西)

締め切り期限の関係から、理事会
の承認を経ないで申請した。それに

対し理事会は、ネパールシパブリに

おけるしゃくなげ植林がうまくいつ

てないのに別件の事業に取り組むの

は問題と考える。しかも手続きが理

事会を経ない不適切なもので本件は

承認しない。申請は取り下げること

とする。

(不承認)

【報告事項】

一、資料所在調査協力依頼および「山

岳」転載への許可報告(西村)

①千葉県立中央博物館より、平成十

三年度特別展「ヒマラヤ—人、自然、

文化—」の開催にあたり協力要請が

あり了解した。「マナスル初登頂関連

資料」「ナンダ・コット遠征関連資料」

の所在調査をし、協力する。

②京都工芸繊維大学学士山岳会より、

当会会員でもある故新井清氏の「山

岳」九四年の追悼文の転載。

二、アルプス山岳館整備基本構想懇

話会への参加依頼(西村)

松本市の依頼に対し、山浦源太郎

信濃支部長に参加をお願いした。

三、行事、集会などの参加報告

①大森副会長より、日山協新年会(一

月二十日開催)、都岳連新年会(一月

二十三日開催)へ、また竹内副会長

より、山梨支部新年会(二月四日開

催)への参加報告があった。

四、委員会報告

財務委員会・村井(龍)

①月次会計報告。

②入会者数が予定より四十名くらい

少ないので、入会者を増やすよう努

めたい。

③会費未納入による除籍対象者(別

表)には会費を納入して会を継続す

るよう各自働きかけてもらいたい。

③会報「山」を、各支部に多めに配

布し、会員獲得に資するよう二百五

十部程度の増刷を検討する。

会報委員会・村井(葵)

「山」二月号の特集は「六十九歳ハ

ンテングリに登る 内田敏子会員」

「ペルーアンデス事情 早大岳友会」

フィルムビデオ委員会・鰐坂

北アルプス白馬連峰

白馬五電スキー場直下

スキーツアー、雪上訓練、クロスカントリー、スノーシュー、
によるスノートレッキングにご利用ください。

スキーはゴールデン
ウィークまで、
スノートレッキング、
スノーシューは
5月中は可能です。
リフト割引券あり。

和牛料理の宿



ひまわり

長野県北安曇郡白馬村神城22114-17
TEL (0261) 75-2292(代)
FAX (0261) 75-3284

現在当会所有のビデオテープリス
ト(二四五本)を別添資料により報告
青年部・松原

カンチエンジュンガ登山隊一九九
八年報告書を刊行した。

医療委員会・増山(レポートによる)

遭難対策委員会と合同で、一月十
一日十八時三十分よりアルカディア
市ヶ谷において、イゴール・ガモフ
教授をお招きして、「新世代の携帯型
加圧バッグ(新ガモフバッグ)そし
てガモフベツト」のタイトルで講演
会を開催した。約四十名が参加した。
インターネット小委員会・高原

JACホームページを二月よりリ
ニューアルした。委員会のメンバ
ーは、新鮮な記事で魅力あるホームペ
ージとすべく頑張っているのので、
皆さんの協力をお願いしたい。

海外連絡委員会・増山(レポート)
英国山岳会より大塚会長宛にあつ
た以下の依頼に対し、賛同する旨の
回答をした。

「一昨年、エベレスト登頂を目指し
たマロリーの遺体が発見されたとき
その写真などが不用意に報道、出版
されたが、アーヴィンの遺族から、
今後発見物があつたとき、アーヴィ
ン関係者の了解を得て対応すること
を公的に要求する」

自然保護委員会・河西
①高尾の森の敷地内に物置小屋設置

のための土地を、約一六㎡(使用料
は年六千円)を借りることにした。
また森づくりのための道具類へ貼る
シールにJACマークを使用するこ
との了解をとった。

②「高尾の森」―小下沢風景林の森
づくり活動―通信一号「木の目草の
芽」四三号発刊の報告。高尾の森「植
樹祭」を四月十五日に行う。
資料委員会・鯉坂

鈴木正俊永年会員より版画の寄贈。
その他

①評議員会を二月十七日(土)十三時よ
り開催する。

②中村監事より、理事は長期間留守
にする場合は代行をたてる等対策を
講じる必要がある、と意見があつた。
③国際山岳年行事(二〇〇二年予定)
についての打ち合わせに、当会より
高遠理事、江本海外連絡委員会委員
に出席を依頼する。

●会員異動

物故

西郷正郎(四九八六) 01・1・18

奥谷潤之輔(二〇〇七四) 01・2・2

田中哲郎(二〇五七〇) 01・2・20

退会

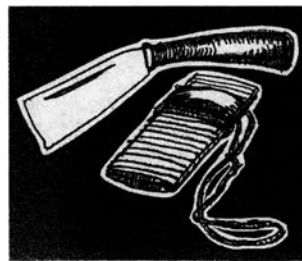
羽根田二郎(二〇八六二)

野上 薫(二二九二四)

山下隆司(二二四九二)

川井久造(二一三三五)

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆新会員のための

「徳本峠越えとウエストン祭」

山研運営委員会・信濃支部
新しい会員が山岳会を理解し、仲
間作りの手助けとなる企画です。

地元安曇村の子供たち、山岳会員、
一般登山者などと初夏の徳本峠を越
えて上高地に入ります。山岳研究所
に一泊し、新緑がまぶしい梓川の河
畔で行われる「ウエストン碑前祭」
と「午餐会」に参加します。

日時 六月二(土)～三日(日)

費用 一万二千元(山研一泊二食、
午餐会を含む)

現地集合・解散

参加対象会員 会員No.一三二〇三の

平成十一年度下期入会者から

平成十三年度三月末入会の新

会員

申込 五月十五日までに会員番号、

住所、氏名、電話番号を明記
し、ハガキかファックスで山
研担当理事坂本正智宛(二二

〇六・〇〇三一多摩市豊ヶ丘
六・二・五・一〇二 fax 〇四
二・三七三・三三三八)

*申込者には詳細案内を送付します。
◆第三十九回木暮理太郎翁

碑前懇親会 主管・山梨支部

第三代会長、木暮理太郎翁逝きて
五十六年、翁の聲に接した会員、
その数、十指を欠いております。で
も今年も翁を偲び、新緑の金山平で
懇親会を開きます。

日時 五月二十六(土)～二十七日(日)

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平
交通 JR中央線韮崎駅下車、増富
温泉行きバス終点下車、徒歩
九十分(タクシの便あり)

宿泊 金山平・金山山荘(四・〇五
五一・四五・〇四三五)

二十七日 十八時より懇親会

二十八日朝 碑前祭、その後記念山

行 車でクリスタル・ライン

経由、木賊峠・観音峠・グリ

ンラインと和田峠：日山

(六三〇メートル)：大宮山

(六六三メートル)：森林学習

展示館：健康の森(昼食) J

R甲府駅で解散

地図 二万五千分の一(甲府北部、

茅ヶ岳、瑞牆山)

費用 一万円(懇親会、記念品、一

泊三食、飲み物、イワナの骨

酒他、甲府駅までの車代)

申込 五月十五日までに山村正光宛
(〒四〇〇・〇〇一六 甲府市
武田三・六・二七 Ⅷ&Ⅸ・
〇五五・二五一・三一七五)

◆探索山行「奥会津に高層湿原と
ブナ林を訪ねる」 科学委員会

日時 六月十六(出)〜十七日(日)
十六日 高層湿原の駒止湿原
十七日 ブナの原生林の志津倉山

講師 山田彬氏(科学委員会) 他
費用 一万五千元(含宿泊、バス代)

集合 JR南浦和駅からバス
宿泊 福島県三島町・宮下温泉
ふるさと荘

定員 先着四十名
申込 五月二十日までに丸山修一宛

ハガキ、ファックス、メール
(〒一〇二・〇〇七二 千代田
区飯田橋二・九・四・一〇〇
五 Ⅸ・〇三・五二二・二七
〇三六 Eメール Ⅷ@kagaku

@jac.or.jp) へ。
*申込者には詳細案内を送付します。
*概要は日本山岳会ホームページ
「科学委員会」にも掲載してあります。

◆第十三回懇親山行「丹沢」
92同期会

春爛漫の丹沢で存分に森林浴を。
日時 五月十二日(出) 雨天決行
場所 丹沢 鍋割山(大倉経由)

集合 小田急線渋沢駅改札口八時三
十分

申込 五月五日(出)までに沼田俊雄宛
(Ⅷ〇四八・七七二・八三三三)
◆第十二回山行「千頭星山」
つくも会(99同期会)

日時 五月二十七日(日)
場所 甘利山・千頭星山

集合 JR八王子駅北口七時三十分
行程 八王子―車―甘利山―千頭星
山(往復)

申込 五月八日までに柴田俊子まで
(〒一九四・〇〇四一 町田市玉
川学園五・一・九・五八 Ⅷ&
Ⅸ〇四二・七三二・七一四八)

氏名、会員番号、連絡先を明
記し、ハガキかファックスで。

*同期以外の方の参加も歓迎します。
◆00の会発足と記念集会 00同期会

昨年四月から今年の三月末までに
本会の新入会員となった者の同期会
を結成することになりました。結団
の集会和記念山行を行います。

日時 六月九(出)〜十日(日)
会場 山梨忍野・杉並区立富士学園
(新宿から山中湖行きバス忍
野八海下車五分)

日程 九日結団式集合 十日高座山
登山の後、午後解散

申込 同期の方へは個別に通知、同
行希望者も歓迎(五月二十一
日まで左記まで)

問合せ 三渡忠臣(Ⅷ〇四二六・二
五・〇五五一)

◆初夏の山行案内 ジャック93会
蓼科高原の名残りの桜と北八ヶ岳
の新緑を楽しむ山行を開催します。
日程 五月十九(出)〜二十日(日)
一泊二日

登山 五月二十日 北横岳、縞枯山
周辺

宿泊 東京トヨペット(株)笹丸平ロッ
ジ

参加費 八千円(一泊二食及び懇親
会費用)

現地集合時間 五月十九日 十五時
(往復交通費各自負担)

定員 先着二十五名
問合せ 和波久基(〒一四三・一〇〇
二四 大田区中央五・二二・
一四 Ⅷ〇三・三七五一・六
四三八) 花澤廣巳(Ⅷ〇三・
三四八三・〇九二七) まで。

申込 五月七日必着、ハガキに会員
番号、住所、氏名、電話(F
AX)を明記の上、花澤廣巳
宛(〒一五七・〇〇七二 世田
谷区祖師谷一・一七・八)

*申込者には詳細を送付します。
◆第十八回全国支部懇談会予告

石川支部
今秋石川支部主管で開催する全国
支部懇談会の概要をご案内します。

九月二十九日(出) 懇親会
九月三十日(日) 懇親登山
白山スーパール林道〜三方岩岳

会場 加賀市片山津温泉(あとかや
佳水郷)
費用 二万二千元(予定)
定員 ありませんので夫婦でぜひ
どうぞ。支部以外の方も歓迎。

*詳細は六月号に掲載します。
◆ストレッチ講座 山げらの会

ストレッチと筋トレのエクササイ
ズを毎月行っています。

日時 五月十四日(月)、六月四日(月)
十八時三十分〜

場所 山岳会ルーム
*軽装、敷物をご用意ください。

申込 Ⅷ&Ⅸ・〇三・三三四五・五
三八八 三井まで

■訂正 三月号(六七〇)一〇ページ
四段三行目「……一九八四年十月ド
イツ隊、三名登頂と続くが、八五年の
アルパインジャーナルでは、クリス・
ポニントンがドイッ隊の……」太字
の部分が抜け落ちてしまいました。
お詫びして訂正します。

日本山岳会会報 山 671号

2001年(平成13年)4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ: http://www.jac.or.jp

Eメール: jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社